書　評・紹　介

藤崎宏子・池岡義孝　編著
『現代日本の家族社会学を問う―多様化のなかの対話』

ミネルヴァ書房，2017年９月，290ページ

本書は，日本家族社会学会の創立20周年を記念して開催された2009年・2010年学会大会のテーマセッション「日本の家族社会学は今――過去20年の回顧」の成果をもとに企画され，1990年代以降の約四半世紀を対象として日本の家族社会学研究の動向の把握と総括を行った書籍である．第Ⅰ部では理論とテーマ（教育，ケア，社会階層論，フェミニズム論，人口学）の視点から，第Ⅱ部では研究の方法論（計量的研究，二次分析，質的研究，家族史・社会史研究）の視点から家族社会学研究の動向を整理し，第Ⅲ部では家族研究全体に対する総括と今後の課題を論じるという構成になっている．序章において，日本の家族社会学研究史の節目には研究のクリティカル・レビューとその成果を踏まえた研究の方向性への示唆・総括が行われているとの説明があることから，本書もそうした営為の最新の成果として位置付けられる．

本書で扱っている内容・視点は多岐にわたるため，ここでは家族社会学の理論と研究の方法論に関する部分を中心に要約を示す．1990年代以降の日本の家族社会学研究は，家族多様化説とそれを補強する近代家族論を基軸に進んできたが，近年はそれに続く新たな求心的パラダイムの確立がなされておらず，家族社会学が今後何をめざして何をなすのかを再考することが求められている（第１章）．研究手法に着目すると，調査データの利用可能性の飛躍的な増大，分析技法の洗練・高度化，コンピューターの利便性の向上が進んだことで計量的研究が進歩を遂げてきた（第７章）が，データの二次分析を行った研究は「単発的であり相互に独立性が強い傾向」（第８章）があるといった問題点も明らかになってきた．そして，質的研究，歴史的研究においても研究技法の高度化が進んできた結果，研究が手続き論議に終始しがちな状況を生んでおり「『理論』と『方法』の関連を明確化する努力」が必要とされはじめている（第13章）．

評者が特に関心をもったのは「研究領域の境界の不明瞭化」（序章）についてである．「計量的な家族研究に取り組む学問間の垣根は，どんどん低くなっている」（７章）ことは多くの計量研究者が実感を持っていると思われる．また，隣接学問領域間，量的研究と質的研究の間の「架橋」と「対話」が今後重要性を増してくるであろうことは，人口学においても予見される．こういった潮流の中で，自身の直接的な専門とは異なる研究領域，研究テーマ，研究手法がどのような背景をもっているのかを一通り把握しておくことは，「対話」の際の重要な鍵になるのではないだろうか．このような時に，ある研究領域全体の動向を知ることができる本書のような書籍は大いに役立つであろう．

ここでは取り上げなかったが，第Ⅱ部のテーマ別の研究動向の整理（第２章から第６章）は，各章単独で充実した研究レビューとなっている．家族社会学とかかわりの深い人口学研究者にとって，幅広く活用することができる一冊である．

（中村真理子）